

## 2020 年 奈良県立医大 推薦入試問題 (数学) 解答

【1】 以下の空欄を適切に埋めて文章を完成させよ。

以下の積分で定義された数列  $\{a_n\}$ ,  $\{b_n\}$  を考える。

$$a_n = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^n x \, dx, \quad b_n = \int_0^{\frac{\pi}{2}} x \cos^n x \, dx$$

(1)  $n \geq 2$  に対し,  $a_n = \boxed{\text{ア}}$   $a_{n-2}$  が成り立つ。

(2)  $n \geq 2$  に対し,  $b_n = \boxed{\text{イ}}$   $b_{n-2} - \frac{1}{n^2}$  が成り立つ。

(3)  $b_n = c_n a_n$  により数列  $\{c_n\}$  を定義すると,  $n \geq 2$  に対し,  $c_n = c_{n-2} - \frac{1}{\boxed{\text{ウ}} a_{n-2}}$  が成り立つ。

**考え方**  $a_n$  の漸化式は教科書などにも載っており有名ですが,  $b_n$  は目新しいです。  $a_n$  の場合と同じ発想で計算できますが, なかなか難しいです。

**解**

(1)

$$\begin{aligned} a_n &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos^n x \, dx \\ &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} \cos x \cdot \cos^{n-1}(x) \, dx \\ &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} (\sin x)' \cos^{n-1}(x) \, dx \\ &= \left[ \sin x \cos^{n-1} x \right]_0^{\frac{\pi}{2}} - \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin x (\cos^{n-1} x)' \, dx \\ &= -(n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin x \cdot \cos^{n-2} x (-\sin x) \, dx \\ &= (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin^2 x \cdot \cos^{n-2} x \, dx \\ &= (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} (1 - \cos^2 x) \cdot \cos^{n-2} x \, dx \\ &= (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} (\cos^{n-2} x - \cos^n x) \, dx \\ &= (n-1)(a_{n-2} - a_n) \end{aligned}$$

$$\therefore a_n = \frac{n-1}{n} a_{n-2}$$

(2)

$$\int x \cos x \, dx = \int x(\sin x)' \, dx = x \sin x - \int \sin x \, dx = x \sin x + \cos x + C$$

$$\therefore (x \sin x + \cos x)' = x \cos x$$

$$\begin{aligned} b_n &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} x \cos^n x \, dx \\ &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} x \cos x \cdot \cos^{n-1} x \, dx \\ &= \int_0^{\frac{\pi}{2}} (x \sin x + \cos x)' \cos^{n-1} x \, dx \\ &= \left[ (x \sin x + \cos x) \cos^{n-1} x \right]_0^{\frac{\pi}{2}} - \int_0^{\frac{\pi}{2}} (x \sin x + \cos x) (\cos^{n-1} x)' \, dx \\ &= -1 - (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} (x \sin x + \cos x) \cdot \cos^{n-2} x (-\sin x) \, dx \\ &= -1 - (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} (-x \sin^2 x - \sin x \cos x) \cos^{n-2} x \, dx \\ &= -1 + (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} x \sin^2 x \cos^{n-2} x \, dx + (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sin x \cos^{n-1} x \, dx \\ &= -1 + (n-1) \int_0^{\frac{\pi}{2}} x(1 - \cos^2 x) \cos^{n-2} x \, dx + (n-1) \left[ -\frac{1}{n} \cos^n x \right]_0^{\frac{\pi}{2}} \\ &= -1 + (n-1)(b_{n-2} - b_n) + (n-1) \times \frac{1}{n} \\ &= (n-1)(b_{n-2} - b_n) - \frac{1}{n} \end{aligned}$$

$$\therefore b_n = \frac{n-1}{n} b_{n-2} - \frac{1}{n^2}$$

(3) (1), (2) より,

$$\frac{b_n}{a_n} = \frac{\frac{n-1}{n} b_{n-2} - \frac{1}{n^2}}{\frac{n-1}{n} a_{n-2}} = \frac{b_{n-2}}{a_{n-2}} - \frac{1}{n(n-1)a_{n-2}}$$

$$\therefore c_n = c_{n-2} - \frac{1}{n(n-1)a_{n-2}}$$

■

&lt;解答&gt;

ア	イ	ウ
$\frac{n-1}{n}$	$\frac{n-1}{n}$	$n(n-1)$

【2】 以下の問いに答えよ。

一辺の長さが  $a$  の正三角形  $ABC$  を考え、その重心を  $G$  とする。

- (1)  $\overline{AX} = \overline{BX}$  をみたす点  $X$  全体からなる集合はどのような図形か答えよ。
- (2)  $ABC$  の辺上または内部にある点のうち、 $\overline{AP} \leq \overline{GP}$  をみたす点  $P$  全体からなる図形の面積を求めよ。
- (3)  $ABC$  の辺上または内部にある点のうち、 $\overline{GP} \leq \overline{AP}$ ,  $\overline{GP} \leq \overline{BP}$ ,  $\overline{GP} \leq \overline{CP}$  をみたす点  $P$  全体からなる図形の面積を求めよ。

**考え方** ほぼ直観的に分かりますが、座標できちんと考えてみます。

**解**

(1) 線分  $AB$  の垂直二等分面。

(2) 原点を中心とする単位円に内接する正三角形を考える。

$A(1, 0), B(-\frac{1}{2}, \frac{\sqrt{3}}{2}), C(-\frac{1}{2}, -\frac{\sqrt{3}}{2})$  と設定しても一般性を失うことはない。

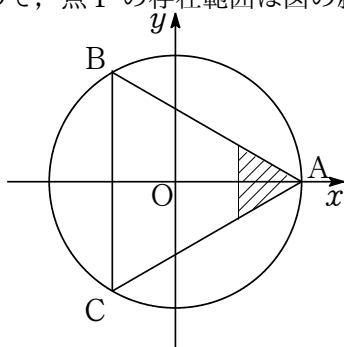
このとき、三角形  $ABC$  の重心  $G$  は原点となる。

$P(X, Y)$  とおくと、 $\overline{AP} = \sqrt{(X-1)^2 + Y^2}$ ,  $\overline{GP} = \sqrt{X^2 + Y^2}$  なので、 $\overline{AP} \leq \overline{GP}$  より、

$$\sqrt{(X-1)^2 + Y^2} \leq \sqrt{X^2 + Y^2}$$

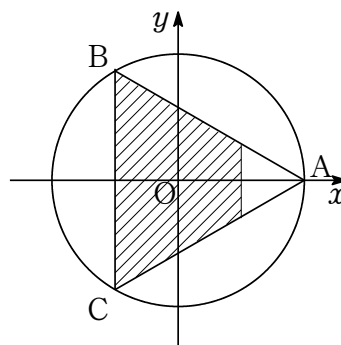
両辺正より、2乗して整理すると、 $X \geq \frac{1}{2}$

点  $P$  は三角形  $ABC$  の辺上または内部の点であるので、点  $P$  の存在範囲は図の斜線部分である。

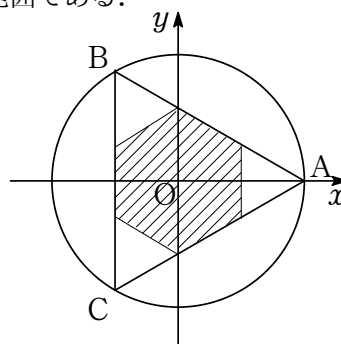


図の斜線部分の面積は三角形  $ABC$  の面積の  $\frac{1}{9}$  倍であるので、求める面積は  $\frac{\sqrt{3}}{4} a^2 \times \frac{1}{9} = \frac{\sqrt{3}}{36} a^2$ .

(3)  $\overline{GP} \leq \overline{AP}$  をみたす点  $P$  の存在領域は、(2) の場合と不等号の向きが逆であるので、図の斜線部分になる。



図の対称性から、 $\overline{GP} \leq \overline{BP}$ ,  $\overline{GP} \leq \overline{CP}$  についても同様であり、これらの共通部分を考えて、以下の図の斜線部分になる。これが求める点  $P$  の存在範囲である。



図の斜線部分の面積は三角形  $ABC$  の面積の  $\frac{2}{3}$  倍であるので、求める面積は  $\frac{\sqrt{3}}{4} a^2 \times \frac{2}{3} = \frac{\sqrt{3}}{6} a^2$ .

**注** (1) は、平面上で考えれば「線分  $AB$  の垂直二等分線」となります。(2) と (3) が平面上での話なので、このように解答しても正解かもしれませんが、最初の問題文に「平面上で」とか「空間内で」と明記しておくべきでしょう。

[3] 以下の空欄を適切に埋めて文章を完成させよ。

空間内の位置ベクトル  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$  は大きさ 1 で,  $\vec{a} \neq \vec{b}$  かつ  $\vec{a} \neq -\vec{b}$  とする. この空間内の原点を始点とする位置ベクトル  $\vec{r}$  に対し,  $\vec{a}$ ,  $\vec{b}$  を用いて

$$f(\vec{r}) = \vec{r} - 2(\vec{r} \cdot \vec{a})\vec{a}, \quad g(\vec{r}) = \vec{r} - 2(\vec{r} \cdot \vec{b})\vec{b}$$

と定める. ただし,  $\vec{r} \cdot \vec{a}$  等はベクトルの内積を表す.

(1) ベクトル方程式  $f(\vec{r}) = \vec{r}$  をみたす  $\vec{r}$  の終点全体は, 原点を通り  に直交する平面をなす.

(2) 任意の位置ベクトル  $\vec{r}_1$ ,  $\vec{r}_2$  に対して,

$$f(\vec{r}_1) \cdot f(\vec{r}_2) = g(\vec{r}_1) \cdot g(\vec{r}_2) = \text{イ}$$

および

$$g(f(\vec{r}_1)) \cdot g(f(\vec{r}_2)) = \text{ウ}$$

が成り立つ.

(2)  $H = \{m\vec{a} + n\vec{b} \mid m, n \text{ は任意の実数}\}$  とする. 平面  $H$  内に, 互いに直交する大きさ 1 のベクトル  $\vec{e}_1$ ,  $\vec{e}_2$  を,  $\vec{e}_1 = \vec{a}$  となるようにとる.  $\vec{b}$  と  $\vec{e}_1$  のなす角を  $\theta$  とすると,  $\vec{b}$  は

$$\vec{b} = \cos\theta\vec{e}_1 + \sin\theta\vec{e}_2$$

と表すことができる. このとき,  $g(f(\vec{e}_1))$  と  $g(f(\vec{e}_2))$  を計算すると,

$$g(f(\vec{e}_1)) = \text{エ} \vec{e}_1 + \text{オ} \vec{e}_2$$

$$g(f(\vec{e}_2)) = -\text{オ} \vec{e}_1 + \text{エ} \vec{e}_2$$

**考え方** 文字が多くてゴチャゴチャしていますが, やってることは単純なベクトルの計算問題です. 図形的な考察をできなくもありませんが, そんなことをせずとも, とにかく文章を読んで, 問題文通りに計算すれば解答できます. 残念ながら, 見掛け倒しの問題であると言わざるを得ません.

**解**

$$(1) f(\vec{r}) = \vec{r} \text{ より, } \vec{r} - 2(\vec{r} \cdot \vec{a})\vec{a} = \vec{r}$$

$$\text{よって, } (\vec{r} \cdot \vec{a})\vec{a} = \vec{0}$$

$$\vec{a} \neq \vec{0} \text{ なので, } \vec{r} \cdot \vec{a} = 0$$

したがって,  $\vec{r}$  の終点全体は, 原点を通り  $\vec{a}$  に直交する平面をなす.

(2)

$$\begin{aligned} f(\vec{r}_1) \cdot f(\vec{r}_2) &= (\vec{r}_1 - 2(\vec{r}_1 \cdot \vec{a})\vec{a}) \cdot (\vec{r}_2 - 2(\vec{r}_2 \cdot \vec{a})\vec{a}) \\ &= \vec{r}_1 \cdot \vec{r}_2 - 2(\vec{r}_2 \cdot \vec{a})(\vec{r}_1 \cdot \vec{a}) - 2(\vec{r}_1 \cdot \vec{a})(\vec{r}_2 \cdot \vec{a}) + 4(\vec{r}_1 \cdot \vec{a})(\vec{r}_2 \cdot \vec{a})|\vec{a}|^2 \\ &= \vec{r}_1 \cdot \vec{r}_2 \quad (\because |\vec{a}| = 1) \end{aligned}$$

$g(\vec{r}_1) \cdot g(\vec{r}_2)$  も同様 ( $\vec{a}$  が  $\vec{b}$  に変わるだけで,  $|\vec{b}| = 1$  だから).

$$\therefore f(\vec{r}_1) \cdot f(\vec{r}_2) = g(\vec{r}_1) \cdot g(\vec{r}_2) = \vec{r}_1 \cdot \vec{r}_2$$

したがって, この結果を用いると,

$$g(f(\vec{r}_1)) \cdot g(f(\vec{r}_2)) = f(\vec{r}_1) \cdot f(\vec{r}_2) = \vec{r}_1 \cdot \vec{r}_2$$

(3)

$$f(\vec{e}_1) = \vec{e}_1 - 2(\vec{e}_1 \cdot \vec{a}) \vec{a}$$

$$\vec{e}_1 = \vec{a} \text{ より, } \vec{e}_1 \cdot \vec{a} = |\vec{e}_1|^2 = 1$$

$$\text{よって, } f(\vec{e}_1) = \vec{e}_1 - 2\vec{e}_1 = -\vec{e}_1$$

$$g(f(\vec{e}_1)) = g(-\vec{e}_1) = -\vec{e}_1 + 2(\vec{e}_1 \cdot \vec{b}) \vec{b}$$

$$\vec{e}_1 \cdot \vec{b} = \vec{e}_1 \cdot (\cos \theta \vec{e}_1 + \sin \theta \vec{e}_2) = \cos \theta |\vec{e}_1|^2 + \sin \theta \vec{e}_1 \cdot \vec{e}_2 = \cos \theta \text{ なので,}$$

$$g(f(\vec{e}_1)) = -\vec{e}_1 + 2\cos \theta (\cos \theta \vec{e}_1 + \sin \theta \vec{e}_2) = (2\cos^2 \theta - 1)\vec{e}_1 + 2\sin \theta \cos \theta \vec{e}_2 = \cos 2\theta \vec{e}_1 + \sin 2\theta \vec{e}_2$$

■

☞注 解答欄を見れば,  $g(f(\vec{e}_2))$  は計算せずとも,  $g(f(\vec{e}_2)) = -\sin 2\theta \vec{e}_1 + \cos 2\theta \vec{e}_2$  であることが分かりますが, いちおう, きちんと導いてみましょう.

$$f(\vec{e}_2) = \vec{e}_2 - 2(\vec{e}_2 \cdot \vec{a}) \vec{a}$$

$$\vec{e}_1 = \vec{a} \text{ より, } \vec{e}_2 \cdot \vec{a} = \vec{e}_2 \cdot \vec{e}_1 = 0$$

$$\text{よって, } f(\vec{e}_2) = \vec{e}_2$$

$$g(f(\vec{e}_2)) = g(\vec{e}_2) = \vec{e}_2 - 2(\vec{e}_2 \cdot \vec{b}) \vec{b}$$

$$\vec{e}_2 \cdot \vec{b} = \vec{e}_2 \cdot (\cos \theta \vec{e}_1 + \sin \theta \vec{e}_2) = \cos \theta \vec{e}_1 \cdot \vec{e}_2 + \sin \theta |\vec{e}_2|^2 = \sin \theta \text{ なので,}$$

$$g(f(\vec{e}_2)) = \vec{e}_2 - 2\sin \theta (\cos \theta \vec{e}_1 + \sin \theta \vec{e}_2) = -2\sin \theta \cos \theta \vec{e}_1 + (1 - 2\sin^2 \theta) \vec{e}_2 = -\sin 2\theta \vec{e}_1 + \cos 2\theta \vec{e}_2$$

<解答>

ア	イ	ウ	エ	オ
$\vec{a}$	$\vec{r}_1 \cdot \vec{r}_2$	$\vec{r}_1 \cdot \vec{r}_2$	$\cos 2\theta$	$\sin 2\theta$

[4] 以下の空欄を適切に埋めて文章を完成させよ。

Aさんは家から大学に行くのに  $n$  回電車に乗る。雨が降っていたので、Aさんは傘を1本持って家を出発した。Aさんは、傘を持って電車に乗るたびに、確率  $\frac{1}{3n}$  で傘を車両に置き忘れるものとする。

- (1) Aさんが傘を忘れずに大学にたどり着ける確率  $P_n$  は  である。 $1 \leq k \leq n$  なる  $k$  に対して、 $k$  番目の電車に傘を置き忘れる確率は  である。また、 $1 \leq i \leq j \leq n$  なる  $i$  と  $j$  に対して、 $j$  番目の電車から降りたあと、今まで乗ったどれかの電車に傘を置き忘れたことに気づいたとき、 $i$  番目の電車で傘を置き忘れた確率は  である。
- (2)  $\lim_{n \rightarrow \infty} P_n =$   である。
- (3)  $n = 2m$  (偶数) とする。 $n$  番目の電車から降りたあと、今まで乗ったどれかの電車に傘を置き忘れたことに気づいたとき、1番目から  $m$  番目までのどれかの電車に傘を置き忘れた確率を  $Q_m$  とすると、 $\lim_{m \rightarrow \infty} Q_m =$   である。

**考え方** 条件付き確率の問題です。極限值計算では  $e$  の定義を用いるので確認しておこう。

**解**

(1) 傘を車両に置き忘れない確率は  $1 - \frac{1}{3n}$ 。

傘を忘れずに大学にたどり着ける確率は、傘をすべての車両に置き忘れない確率であるので、

$$P_n = \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^n$$

$k$  番目の電車に傘を置き忘れる確率は、1番目から  $k-1$  番目の電車で傘を置き忘れずに  $k$  番目の電車で置き忘れる確率なので、

$$\left(1 - \frac{1}{3n}\right)^{k-1} \times \frac{1}{3n} = \frac{1}{3n} \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^{k-1}$$

「1番目から  $j$  番目のいずれかの電車で傘を忘れる」事象を  $J$ 、「 $i$  番目の電車で傘を忘れる」事象を  $I$  とすると、求める確率は、条件付き確率  $P_J(I)$  である。

$$P(J) = 1 - \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^j$$

$$P(J \cap I) = \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^{i-1} \times \frac{1}{3n}$$

$$\therefore P_J(I) = \frac{P(J \cap I)}{P(J)} = \frac{\frac{1}{3n} \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^{i-1}}{1 - \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^j}$$

(2)

$$\lim_{n \rightarrow \infty} P_n = \lim_{n \rightarrow \infty} \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^n = \lim_{n \rightarrow \infty} \left\{ \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^{-3n} \right\}^{-\frac{1}{3}} = e^{-\frac{1}{3}}$$

(3) エにおいて,  $j = n = 2m$  とすると,  $\frac{\frac{1}{6m} \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{i-1}}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{2m}}$  であり,  $Q_m$  は

$$\begin{aligned} Q_m &= \sum_{i=1}^m \frac{\frac{1}{6m} \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{i-1}}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{2m}} \\ &= \sum_{i=1}^m \frac{\left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{i-1} - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^i}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{2m}} \\ &= \frac{\left(1 - \frac{1}{6m}\right)^0 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{2m}} \\ &= \frac{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{2m}} \\ &= \frac{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m}{\left\{1 + \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m\right\} \left\{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m\right\}} \\ &= \frac{1}{1 + \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m} \end{aligned}$$

$$\lim_{m \rightarrow \infty} \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m = \lim_{m \rightarrow \infty} \left\{ \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{-6m} \right\}^{-\frac{1}{6}} = e^{-\frac{1}{6}}$$

$$\therefore \lim_{m \rightarrow \infty} Q_m = \frac{1}{1 + e^{-\frac{1}{6}}}$$

■

⇒注  $Q_m$  の  $\Sigma$  計算は, 上の解答では「差分」を考えていますが, 等比数列の和の公式を用いてもできます。

$$Q_m = \sum_{i=1}^m \frac{\frac{1}{6m} \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{i-1}}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{2m}} = \frac{\frac{1}{6m}}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{2m}} \cdot \frac{1 \cdot \left\{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m\right\}}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)} = \frac{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^m}{1 - \left(1 - \frac{1}{6m}\right)^{2m}}$$

<解答>

ア	イ	ウ	エ	オ
$\left(1 - \frac{1}{3n}\right)^n$	$\frac{1}{3n} \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^{k-1}$	$\frac{\frac{1}{3n} \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^{i-1}}{1 - \left(1 - \frac{1}{3n}\right)^j}$	$e^{-\frac{1}{3}}$	$\frac{1}{1 + e^{-\frac{1}{6}}}$

【5】 正整数  $n$  に対し、

$$p(n) = n^3 + 2n^2 + n + 2020^2$$

と定めたとき、以下を証明せよ。ただし、立方数とはある正整数  $m$  を用いて  $m^3$  と表される数のことである。

- (1)  $p(2019)$  は立方数である。  
 (2)  $p(n)$  が立方数となる最大の正整数は 2019 である。

**考え方** (2) が難しい。(1) で  $n = 2019$  のときに立方数であることを示した上で、(2) で「立方数になる最大の整数が 2019 であること」を示すのですから、「2020 以上では立方数にならないこと」を示せば良いわけです。おそらく「立方数になったと仮定して矛盾を導く」と考えた人も多いと思いますが、うまくいきません。実は、全く同じ考え方で証明できる問題を「犬ブリ」で解説してあります。「整数問題攻略のための 5 つの原則」のいうプリントを見てください。その一番最初の問題とほぼ同じ。ある意味、的中でした！

**解**

(1)

$$\begin{aligned} p(2019) &= 2019^3 + 2 \cdot 2019^2 + 2019 + 2020^2 \\ &= 2019^3 + 2 \cdot 2019^2 + 2019 + (2019 + 1)^2 \\ &= 2019^3 + 2 \cdot 2019^2 + 2019 + 2019^2 + 2 \cdot 2019 + 1 \\ &= 2019^3 + 3 \cdot 2019^2 + 3 \cdot 2019 + 1 \\ &= (2019 + 1)^3 \\ &= 2020^3 \end{aligned}$$

よって、 $p(2019)$  は立方数である。

(2)

$$\begin{aligned} p(n) &= n^3 + 2n^2 + n + 2020^2 \\ &= n^3 + 3n^2 + 3n + 1 - n^2 - 2n - 1 + 2020^2 \\ &= (n + 1)^3 + 2020^2 - (n + 1)^2 \end{aligned}$$

(i)  $n = 2019$  のとき、  
 $2020^2 - (n + 1)^2 = 0$  なので、 $p(n) = (n + 1)^3$   
 となり、 $p(n)$  は立方数である。

(ii)  $n > 2019$  のとき、

$$\begin{aligned} 2020^2 - (n + 1)^2 &< 0 \text{ なので、} p(n) < (n + 1)^3 \\ \text{また、} p(n) - n^3 &= 2n^2 + n + 2020^2 > 0 \text{ なの} \\ \text{で、} p(n) &> n^3 \end{aligned}$$

$$\therefore n^3 < p(n) < (n + 1)^3$$

このことはつまり、 $p(n)$  が連続する 2 つの立方数の間に存在することを意味しているので、 $p(n)$  が立方数になることはない。

(i)(ii) より、 $p(n)$  が立方数となる最大の正整数は 2019 である。 ■

**注** (1) は、とりあえず代入して計算し、 $p(2019)$  が立方数になることを示しましたが、次の (2)(i) では、もっとうまい方法で  $p(2019)$  が立方数になることを示しています。(1) もこの方法を使えばよいのですが、なかなか気づかないと思うので、(1) はベタな方法でやりました。